史学の導入を決定したことや、アカデミー関係者が1766年以降「活動的ジェントルマン」という言葉を繰り返し使用していたときの背景説明が十分できていない。著者は、理学やアカデミーを支持した「都市エリート」たちがスコットランドの大学の教養教育理念の影響を受けていたからであろうと推測するものである。

個人の思想のもつインパクトや影響力を過大に評価する必要はないけれども、逆にそれを無視しない過小に評価して教育の変化や学校改革の原因を説明することは大変難しいように思われる。結果を重視して敬意を持っておくとすれば、その多くは論証抜きの状況説明に終わってしまう。著者は本书でも敬見された。なお著者は（civil）すべてに「市民としての」という訳訳を当てているが、「市民的」という通常の訳で十分意味は通じるし、またブリストリが提案している商業も、著者が言うような簿記や会計などの「商業」科目にとらず、政治学としての古典派経済学であったことも付け加えておこう。

本書で採られたプロソポグラフィという方法論には、ときには人間関係（人的ネットワーク）だけですべてを割り切ってしまい、歴史の変化に関する要因分析が疎かになる危険性が伴っていることも指摘しておかなければならないだろう。たとえば、1786年のWA閉鎖に伴って理事会はロンドンとマンチェスターにそれぞれ新しい学校を設けるが、二校を誕生させるに至ったとされる理事会内部の「意見対立」ととは何であり、マンチェスターの10倍の寄付と3倍の会費を基に出資したロンドンのハクニー・カレッジがわずか10年間で閉鎖されたのはなぜか、これらの問題については著者は多くを語ろうとしない。一方、マンチェスター・アカデミーについては多くの頁が割かれ、そして寄付に年会費を納めた127名を中心に詳細な一覧が作られ、また同校がWAの人々がネットワークを作り続けて発展し、その延長線上にマンチェスター文学哲学学協会や学術カレッジの設立、さらには奴隷貿易廃止と医療改革の運動があったことが語られるが、マンチェスター・アカデミーが1803年にはヨークに移転せざるを得なくなり（以後各地を転々とする）、非国教派の聖職者養成機関としての存続できたことについては、指摘するだけに留まっている。

18世紀後半に発達した都市文化は、教師個人の私的為に委ねられてきた従来の非国教派アカデミーとは異なって、WAを任意団体として出現させることに大きな力を発揮した。だが、市民的自由と宗教的自由を求めるその文化は、同時にまた、きわめて政治的な文化でもあった。「自由の精神」を讃えて発足したWAも、教育問題が否が応でも置かれることになるこの政治文化的コンテクストから免れることはできなかった。これが、WAの衰退やハクニー・カレッジの短命さ、それに非国教派アカデミーの変質の大きな要因ではなかったかと著者は考えるが、本書の「都市文化と教育」の参照枠にはその視点はあまり見えてこない。

本書を通して読者は教育の「結果」から明らかになったWAの姿を堪能できるが、しかしながら、「結果」からだけでは見えてこないもうひとつの教育の歴史があることも忘れてはならないだろう。

（昭和変、2012年2月、272頁、5,400円）

宮澤康人 著
『＜教育関係＞の歴史人類学』
川村・ヨンマナの近代化文化の変容
渡辺 隆信（兵庫教育大学）

「小さい具体的事実の実証を大きな歴史の流れの中で」、そしてその「小さい具体的事実への問いを教育学の原論の命題にかかわらせて」。これより、1977年に開催された教育学史学会第21回大会のシンポジウム「教育史的研究をいかに形成するか」に、著者が問われたときの教育史研究について、スローガン風に表現した言葉である。

おそらく誰もが認める通り、著者は現在の日本の教育史研究、さらに教育学研究においてもっとも「大きな歴史の流れ」を描くことのできる研究者一人である。本書は、ちょうど上のシンポジウムの頃から35年あまり、教育における「関係」を問い続けた研究の成果であり、先のような問題史的研究を「教育関係」という視点から具体的に展開したものと言える。1998年に刊行された「大人と子どもの関係史学―教育学と歴史的方法―」の続編にあたる。

本書のねらいは、二つある。第一は、「＜教育関
Ⅲ 書評

係＞を基礎的に考えようということ」。そのために、人間をできるだけ長いタイムスパンで、しかもなるべく生物学的根拠的な次元からみることが試みられる。第二は、「＜教育関係＞の問題領域を広げること」。これまで「教育関係」というと、教育方法など、教室の内外のミクロな関係に視野が限定されがちであった。本書は全体主義や共同体といった視点から、教育行政などにもはんなり貫かれるマクロな＜教育関係＞の領域をも対象とする。

本書の全体構成は次の通りである。

はしがき
第１章 ＜教育関係＞の入り口
第２章 ＜教育関係＞と子供が育つタテ・ヨコ・ナオの関係システム
第３章 共同体の文化継承と＜教育関係＞
第４章 死者：生者関係と教養の共同体
第５章 文化継承を媒介するメディアの変容一身体・声・文字、そして……
第６章 ＜教師＞というペルソナの誕生と死と再生一＜共同体＞論の視点から
第７章 共同幻想の言語者＝＜教・師＞一教える主体の呼び名
第８章 教育関係の身体性とエロス性一西洋における教師・生徒関係
第９章 自然の開発と人間の発達一ホモ・エドゥケンス前史
第10章 ホモ・ファーベルとホモ・エドゥケンス
第11章 教育関係の誤認とホモ・エドゥケンスの＜教育的無意識＞
第12章 隠れた／三者の／無意識の／暴力的関係
一＜教育関係＞論の新しい展開へ

引用・参考文献
あとがき

以下では、各章のつながりを意識しながら、それぞれの概要を簡単にみておこう。

第１章は、本書の中心概念である＜教育関係＞について、日本及び欧米における用例を概観したうえで、＜教育関係＞に対する著者の基本的見解を示す。すなわち、＜教育関係＞の射程を、家族のなかの大人と子供の関係（親子関係）や学校におけるそれ（教師・生徒関係）に限定するのではなく、社会における大人と子供の全体としての世代間関係のシステムにまで広げることの必要性を指摘する。また「タテ・ヨコ・ナナ」という人間関係の分析視角を提示する。その上で、＜教育関係＞概念を豊かに、精密にしていくという本書全体の課題に取り組むにあたって予期される課題と困難に言及する。

第２章は、＜教育関係＞の歴史的変容の見取り図を総論的に素描する。そこから導かれるのは、特殊近代的な学校での教師・生徒関係と家庭での親子関係の無力化が今日進行しているという事態の原因が、人類史を巨視的に見るならば、大人と子供の世代間関係、共同体の世代間関係文化の再生産の変容にあるという指摘である。本書の素描を出発点にして、次の第３章から第10章までは、＜教育関係＞の歴史的変容が「共同体」、「メディア」、「教える主体」といった視点から多面的に追求される。

第３章は、「共同体」のイメージをその概念史をたどりながら説明したうえで、農民、職人、商人といった伝統的共同体における文化伝達の様子を、学校における文化伝達の様式と対比させる。また、死者（すでに生き終えてしまった人）や未来世代（まだ生き始めていない人）といった世代を飛び越えたタテの共同体関係性という視点を示す。さらに、共同体の内部のタテ・ヨコ・ナナの関係だけでなく、別の共同体とのあいだのナナの世代関係があるかどうかという問いを提示する。

第4章は、第3章において示唆されたタテの共同体における死者（共同体のいないもの）との関わりというテーマを掘り下げて考察する。そこでは、＜教育関係＞の認識を深めに役立つと考えられる3つの立場、すなわち、死者の身体との関わり方、偉大な死者の言動の記録である古文との関わり方、死者を媒介にした共同体そのものの関わり方を取り上げ、問題の所在を示唆する。

第5章は、教育関係が成り立つところに必ず存在する、関係を媒介するメディアについて論じる。ここでも人類以前の動物のコミュニケーションの進化から、人類における無文字社会、文字の発明、近代の活字文化、そして現代の電子メディアに至る、人類のコミュニケーション・メディアの巨視的な変化が観察される。そして、電子メディアの進展と活字文化の衰退が、文字文化や直接の人格のふれ合いを不可欠とした教育の伝統的概念に根本から再検討を
第6章は、教育関係の主体と想定されてきた教師なるもの樹立と変容を、巨視的にみるかという原理的問いに答えるとするものである。ここでは、占いによって共同体の規模を告知する説行の指導者というペルソナ（役割人格）として誕生した教師が、共同体の崩壊や統合や変容に応じて、死と再生をくり返して、現代にいたったのではないかという解釈が示される。同時に、教師の権威の根拠を個ではなく共同体に求め、その共同体を民族国家から人類共同体まで、さらに自然環境も視野に入れた生態系共同体内の拡大していくことが提案される。

第7章は、第6章の補論となる章である。西洋において、教える主体である教師がどのように呼ばれていかたかも、教師に関する類語を整理することを通じて、教師の原初のイメージを明らかにする。クリスト教ならびにユダヤ教の文化史的背景を踏まながら、主にpastor/pasteur/Pastor（羊飼い、牧師・司祭）の語彙をこまかく検討することにより、教師という存在がもつ「共同幻想の預言者」というイメージが確認される。

第8章は、教育関係を含むより広い概念として教育文化という用語を使い、教育文化を歴史の文脈のなかでみること、そして、文化の身体性に注目することを通じて、教師・生徒関係の一つの側面に光をあて、中心テーマとなるのは、従来の教育学ではほとんど考察されてきなかった、教師と生徒の教育関係にひそむエロス性の問題である。古代ギリシャにおいて多様な形で存在した「愛」の存在、古代ギリシャの同性愛と類似性をもつ中世ギリシャのキリスト教における教師・生徒間の性愛、そして近代のプロテスタント主義における性愛への否定的変化などが、巨視的な比較文化史の立場から論じられる。

第9章は、近代の教育が前提をきたしたホモ・フォーレル（創作者）という人間像の特徴と問題点について論じる。ホモ・フォーレルとは、生態系の外部に超越する自己を描き出し、自然を対象化し、自然を一方的に支配し、利用するという人間的主義、人間中心主義（ヒューマニズム）に基づく人間像である。そこでは、大気、水、土、そして多様な生物の相互依存から構成された地球生命圏によって生かされているという感覚が希薄であった。本章では、近代以降の教育の主要な目的が、そうしたホモ・フォーレルを形成することであった点が批判的に考察される。

第10章は、前章で論じたホモ・フォーレルという人間像との関係で、近代における教育主体であるホモ・エドゥカシス（教育する人間）という人間像について考察する。ここでは、ホモ・フォーレルが自然に働きかけて自然を支配すると相対的に、ホモ・エドゥカシスは子供の自然に働きかけて発達させる＝開発することを目的としていることが明らかにされる。そして、ホモ・エドゥカシスによってその形成が目指されるのがホモ・フォーレルであり、今日に至るまで、ホモ・フォーレルが近代産業社会を支える主要な人間像となっていることが論じられる。

最後の2つの章では＜教育関係＞の再定義を試みる。第11章は、これまでの各章の内容を踏まえて教育関係論の可能性と方向性を包括的に論じた章で、本書の白足であたることと言えよう。近代におけるホモ・エドゥカシスに基づく教育関係の特質と課題をマクロな教育史の視野から論じる。そして、教育関係論の地平を広げていくために必要なこととして、テクノ・ノマ・ナメの多様な関係のネットワークを視野に入れ、とりわけナメの関係を重視すること。そして、「教育的無意識」という探究を導入して、そうした多様な関係における意識性と無意識の関連と区別に注意を払うこと、という理論的課題を議論する。そこで目指されるのは、従来の＜教育関係＞の文化を根気から変える方策を求めて、「地球生命圏の存在根拠」と関わることのできる、意味ある世代間関係の発見への道」（225頁）を探究することである。

第12章は、前章を補足するかたちで、教育関係論の展開可能性を三つの観点から論じたものである。そこでは、一般に教育関係という言葉で想定される「二者の／意識的な／平和な関係」というモデルとは逆に、二者ではなく三者の、意識的でなく無意識的な、そして平和的でなく暴力的な関係、という関係の別のモデルを設定することを通じて、別種の教育関係のあり方が示唆される。

以上、言葉足らずの部分もあるが、読者なりに各章の概要をみてきた。次に、本書の主な特質と意義
について述べたい。

本書の第一の特質は、微視的な場面での流動的な状況がイメージされがちな＜教育関係＞を、巨視的な歴史空間のなかに置いて歴史人類学的に考察している点である。まさに冒頭で紹介したよう、個別の歴史事象を「大きな歴史の流れ」のなかに位置付けることを得意とする著者の真骨頂と言える。ただ付言すれば、歴史人類学という枠組みも固定的なものではない。本書では生物学、民俗学、宗教学、政治学など、歴史人類学にとどまらない多様な研究分野の知見を動員することで、＜教育関係＞の考察に広がりを与えている。

第二の特質は、＜教育関係＞を論じるにあたり、さまざまな方法概念が駆使されている点である。本書のキーワードである「共同体」や「全体主義」、さらには「教育的無意識」といった概念は、目指すべき＜教育関係＞を示すような目的概念ではなく、いずれもこれから新たに創り出す＜教育関係＞のあり方への想像力を刺激する方法概念である。また、それとも＜教育関係＞という概念自体が、人間の発達に影響を及ぼす事実の人間関係の諸相を調べることを通して教育の意味を探求するための方法概念であると考えられる（15頁）。つまり＜教育関係＞とは、「教育」全体のイメージを膨らませ、より豊かにする、発見的で創造的な概念と言える。

第三は、＜教育関係＞の問い直しが教育の問題に止まらず、新しい世界観やライフスタイルの提案となっている点である。近代のホモ・エドゥカヌスや、それと結びついたホモ・ファーベル、ホモ・エコノミクスという人間観を批判的に考察することを通して、「現代人の生き方を変える、一種の文化革命」（176頁）を展開することが求められる。それは、「地球生命圏の存在根拠と関わることのできる、意味ある世代間関係の発見への道」（225頁）であり、別言すれば、「ミクロコスモスである個体生命が、マクロコスモスである自然世界と共鳴しつつ生きていることを体感できる教育の発明」（225頁）という課題である。こうした教育学の原理的命題に関連付けて＜教育関係＞を論じることの意義は大きい。

こうした本書の特質と意義を高く評価した上で、最後に、ないものねだり的な注文になるかもしれないが、本書への要望を2点だけ挙げておきたい。

一つ目は、マクロな歴史的文脈が多面的かつ誇理論じられる一方、小さな具体的事実についての考察をもう少し膨らませてほしいと思う箇所が、いくつかあった。特に、ヨーロッパ中世の「全き家」（ダス・ガントフェハウス）である。本書では、「全き家」において見られたような、大人と子供の多様な関係のなかで発揮されていた形成機能を知ることや、将来の教育のあり方を展望するに大切なる示唆を与えてくれると思う（50頁）という重要な指摘がされている。近代の大人と子供の関係の構造的欠陥を補いいう人類的貴重な知恵が、「全き家」での教育に埋め込まれていると思えば、そこで教育の理念型とその歴史的実態について、より具体的に知りたいと思った。

二つ目は、上で述べた本書の第三の特質に関することである。「現代人の生き方を変える、一種の文化革命」と言った場合の新しい生き方とは、具体的にどのようなものか。またそうした新しい生き方を生み出す文化革命は、ホモ・ファーベル＝ホモ・エコノミクスという人間観が依然支配的な現代社会において、一体どうのよすれば可能になるのか。そうした文化革命に向け動きは「すでにいろいろな形で膨らしつつあるその予感」（225頁）があるとすれば、その予感とはどのようなものか。こうした一連の問いが次々と頭に浮かんだ。そこを追求することで初めて、ホモ・エドゥカヌスとは異なる人間像や新たな＜教育関係＞が生まれる可能性も開けることであろう。われわれ読者に課せられた問いとしても引き受けたい。

教育の臨界、そして教育史研究の臨界を描き出す問題提起的な本書を読むなかで、著者が教育史家であるとともに教育思想家でもあるという思いを改めて強くした。

（学文社、2011年8月、268頁、2,300円）

※表記した金額は本体価格です。